



瓜生氏

日本國畫

東海道

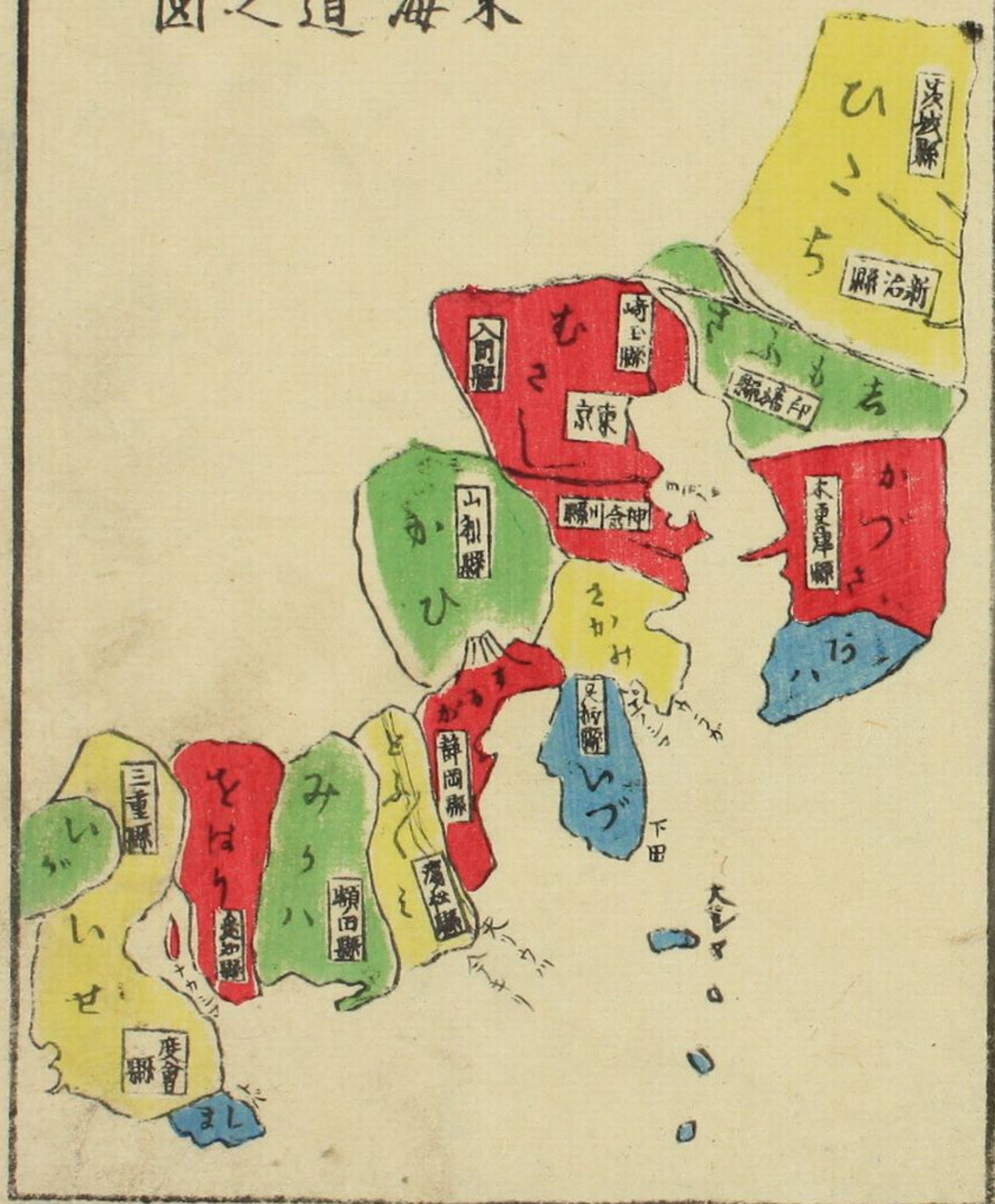
二



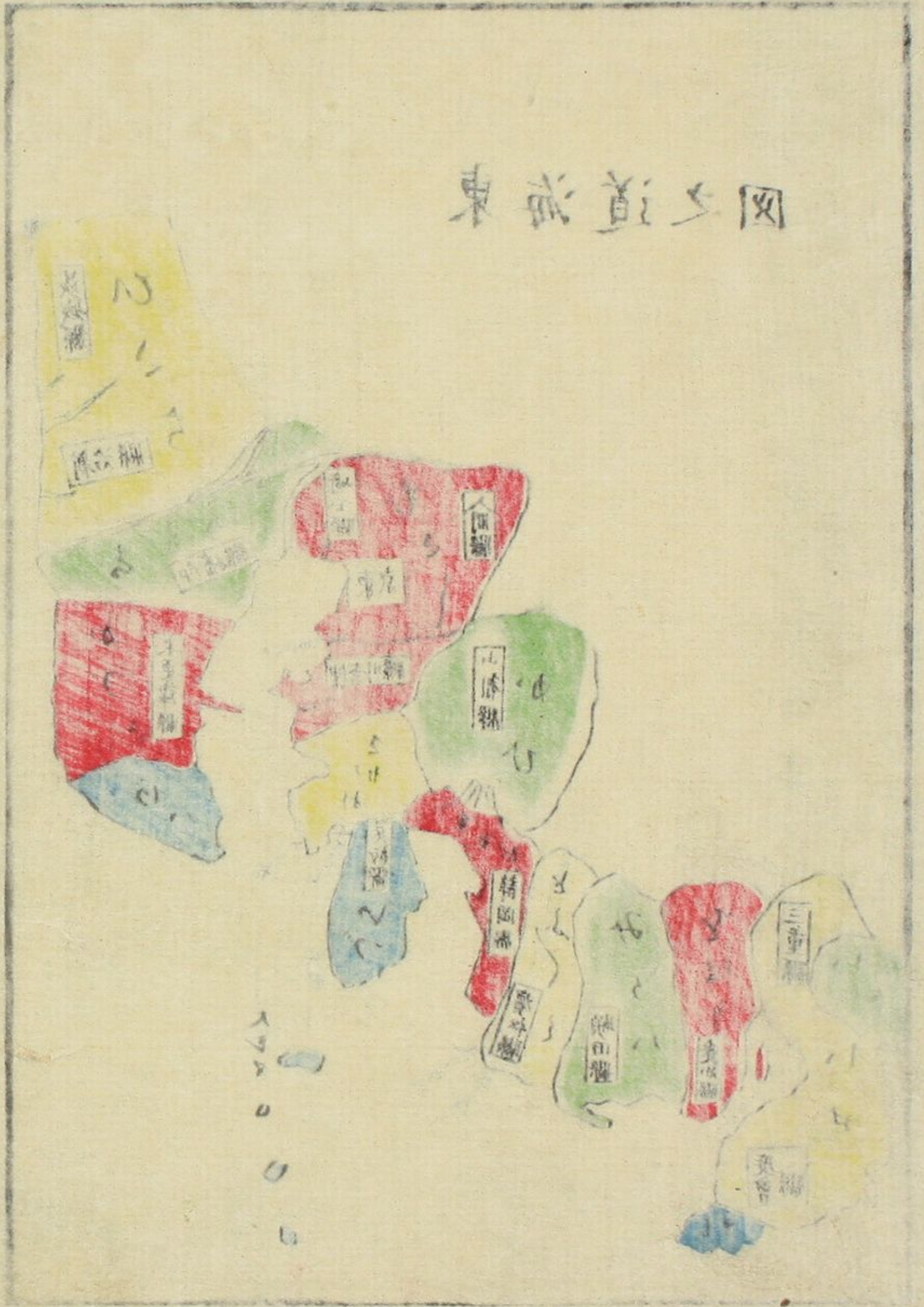




東海道之圖



東武首之図



瓜生氏日本國盡卷二

東海道六十五國

南東海をうり。西也

北陸地をうり。是八道結

魁をうり。

其勇一を伊賀とらふ。五畿乃

日本國盡卷二

東の山國あり海あり國は
北に四つ畿西の和泉あり
對し之の年のはく方里
四方山あり川多し人口纒八
万人あり其候は程好くあり
とん氏程を風として

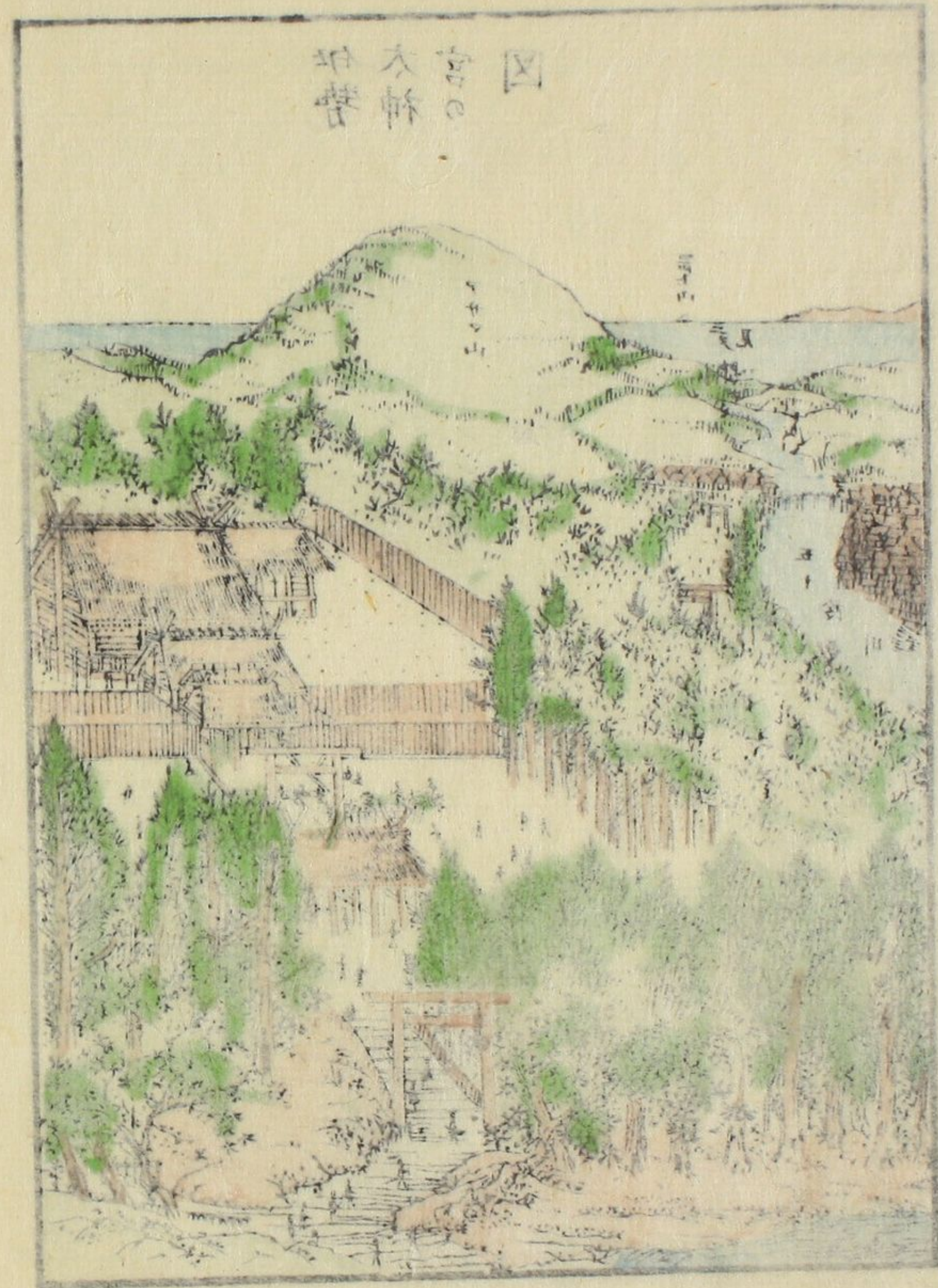
隣に伊勢ありはたなび少
し之地よきことありあり
才二の伊勢を垂仁の帝
來
天照太神の宮所五十鈴は
川に水あり

伊勢太神宮の図



長閑なる。朝日の升る君が
 代の少くも輝く源。こゝに内
 の神神。天照大神。天照大神。天照大神。
 國常立尊。方り内。神靈。つるもい。みち

我々神武天皇
 諸國を西出御紀伊
 大和界にして山々高々
 お並びに國中川を亦多し
 東の方より一休し海濱に
 きて尾張地にお向き今中



其海名けく伊勢の海といふ。
其海小戸八つみく桑名を
つ了一市街も東海及び
一宿驛。尾張の熱田一通ふ
たる。海上七里に渡りふ
里。海を沿く路三里。南に

方の四市。三重の縣の廳あ
り。伊勢一國と山陽國の郡
ハツを支配せり。其又南宮権
高き山回の市中。度
令の縣の廳をも置きて山陽國
五郡。志摩一國。紀伊の一郡

を管轄し。彼れ南支那にこ
の内たるは一國中に人口は
四十七万六千余。氣候は暖
る。平均して山海平均
地味厚く温和。土地の外
風は洋勢のよきを稱す。

ど。風候一俣。秋のくうをふ
金の色をとりし。世音は俣
あるら。肉心。鉛のこく
よ。心ま。た。あ。ま。あ。あ
里。され。と。学。へ。自。り。拜
化。進。知。も。を。敷。

風、くまゝに玉るべし、
 朝熊山、方金舟の名所。
 伊賀、伊勢、近江の界、
 鈴鹿、越前、越後、
 浪風、立花、
 浦、干島、
 似

くまゝに玉るべし、
 阿漕、靴浦、
 又名物、
 海、藻、海、
 津、度、
 中、三、志、磨、
 岬、
 河

の伊良みとお對し伊勢
乃八江の門をたると其の
今もまゝし。廣く海中
指しをいつの源も如暴
浪も岸におのり土を
た方も流る海とたなる今

尚ほさあし。えを本
の地はきし。今此の地
そののち。伊勢の國より
さきし。志摩の國
地へ入るも也。未
玉く小國も。海岸多し

本地ありて人口三万七千余
 気候風俗おとよしく伊
 勢とのまじりしと久し
 し。茲に名高き鳥羽浦
 を東海船の碇泊場とす
 出れども七十五里伊豆の下

田代港より山新入るぬ遠
 舟海をぐるし海船は
 風待まき港ありしと
 船客十分の道の風を
 帆をおろし旅の号をや

まむく。其の産物とてさ
う海苔。鮎ふくた。水生。殊。貝。
四の尾張を伴。勢の海。能。水。
東の岸。干。し。北。山。
お。多。ひ。南。ち。海。深。お。は。ら。
ま。南。北。長。く。東。西。を。接。く。

短く。瓢。粟。を。接。り。附。せ。た。
る。形。象。を。瓢。粟。の。底。に。方。
北。より。本。名。川。流。る。を。出。く。西。
干。向。く。海。ふ。入。る。北。川。美。濃。
と。尾。張。地。の。界。ふ。あ。る。を。一。
名。を。尾。越。川。と。申。す。也。

茲より繁華の第一都會名
古くして市街を三都
下ははくはひしく新を
并べて商人の富家の家
のいそ多し角の聖なる
縣廳も當國七郡を管轄

いそ多し知多の第一都會
一実をいふ岬の隣國
三河の顔田なる其の廳
の支配なり八郡總て其
人口も六十万と云ふなり五
千七百あるも少く氣候

日本國書

暖るなり土地肥えく人
 守る家い色ふし茶のほのき
 風ふく昔より秀なり人
 多しそ産物と綿
 翡翠玉の海鏡と瀬戸
 磁器

才五夫河も矢新川大平川
 と豊川の三つ能大河ある
 あり夫河の國と北畠
 高方南と海濱北と山
 境界も廣くし平原
 暖るなりと物産と南の海

指^さ出^でてくる。渥^{あつ}美^みとつ^つ一^{いち}郡^{ぐん}
を。屋^や張^{ちやう}に智^ち多^たふ打^{うち}等^{どう}ひ
二^に本^{ほん}の^の角^{かく}を^をた^たこ^こも^も少^{すく}く
其^{その}端^{たん}志^し摩^まと^とお^お對^{たい}し^し伊^い
勢^{せい}の^の海^{かい}に^に八^{はち}口^{くち}も^もく^く伊^い良^ら古^こ
と^とら^らる^る岬^{さか}を^をも^も備^び中^{ちゆう}國^{こく}に^に

一^{いち}國^{こく}々^々土^{つち}廣^{ひろ}一^{いつ}躰^{たい}あ^あく^くく^く
五^ご穀^{こく}の^の熟^{じやく}も^も茂^{さか}る^る程^{ほど}と^とも
暑^{あつ}温^{おん}和^わく^く風^{かぜ}候^{こう}も^も実^み多^た
く^くく^くて^て私^しを^をく^くる^る人^{ひと}口^{くち}四^し十^{じゅう}二^に
万^{まん}余^よ額^{がく}田^{でん}の^の郡^{ぐん}岡^{おか}崎^{さき}く^く額^{がく}
田^{でん}に^に射^{しゃ}の^の原^{はら}あ^あり^りく^く冬^{ふゆ}河^が

中と尾張なる。知多一郡
を管轄す。名倉は砥石吉
良雲母。干川温飢。是代紙
是くま夫。あの名物也
才六番。遠江。北。高峰
おひ市。秋葉白嶽。多。多

春日大日。白山中を流る
天龍の川。隣國信濃なる
諏訪の湖より出る。全国中
り蔓延る。東の方。大井川
海道一。大。河。駿河。此
國と。界。南の方

皆海軍。境人板。即。晚。是。其。
沖。即。遠。物。洋。左。平。
海。能。内。一。天。水。道。是。
一。豆。能。眼。を。遮。了。物。也。
風。少。る。冬。河。も。水。も。枯。也。
北。山。中。も。や。空。も。土。頂。

厚くよく熟す。一國中。能。
人口。三十四万二千余人。象。
了。く。智。も。あ。り。く。ち。也。
性。急。の。も。多。し。又。あ。り。一。品。
濱。松。も。明。應。八。年。地。震。
大。山。も。八。海。も。

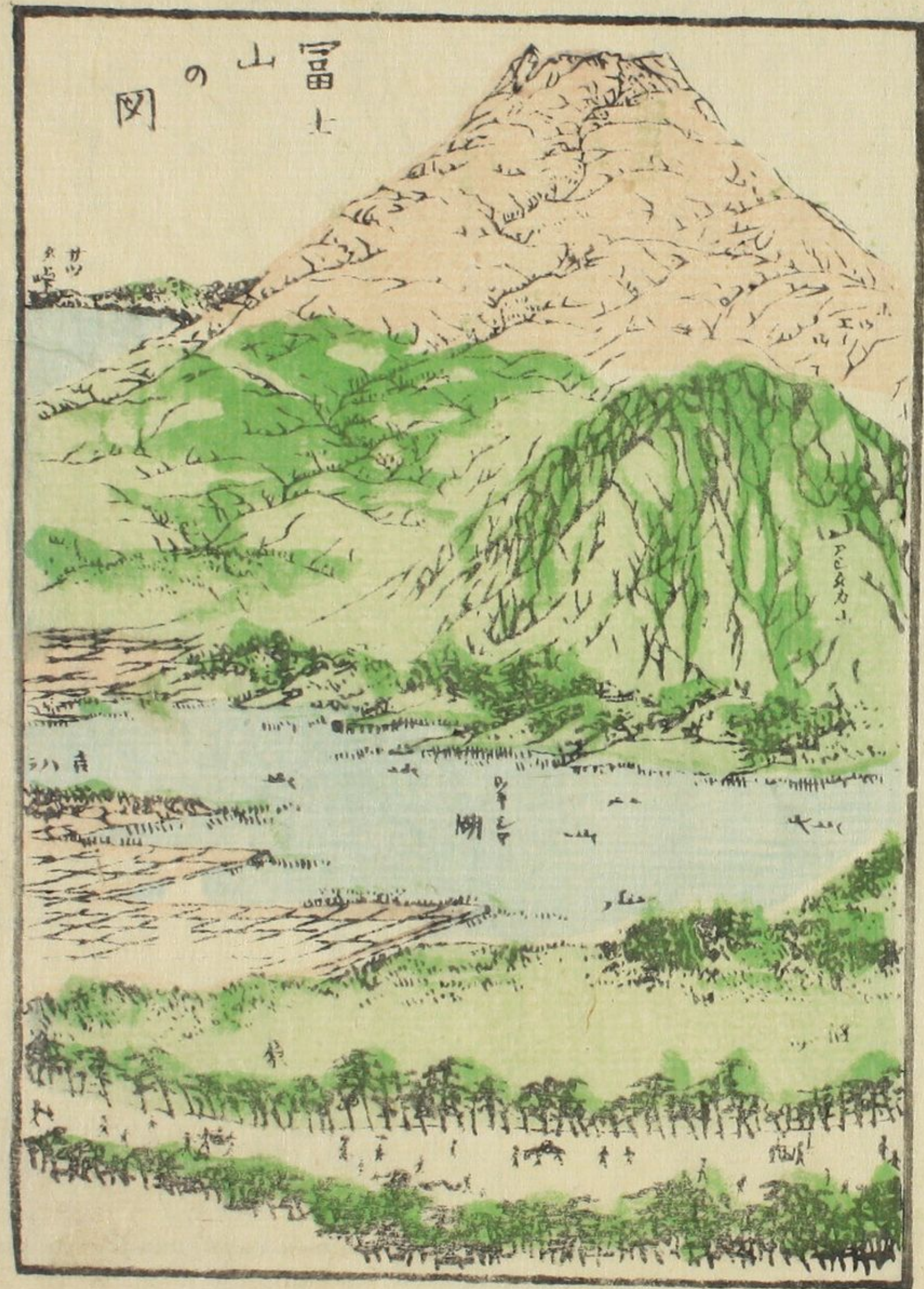
方らるる發りたる今切の意
井能海とて就の川は有る
市街のりしと其野原は
支那なり当ふと其産の概略
を先根葛松葛の布。密柑
柑も也新坂中。持たぬん

之の手、藤原
七、駿河も南海伊豆
一國とお對し中を八海
三保の浦遠あなるとを
まきと右と左と遠州と
豆州の了と左と右と

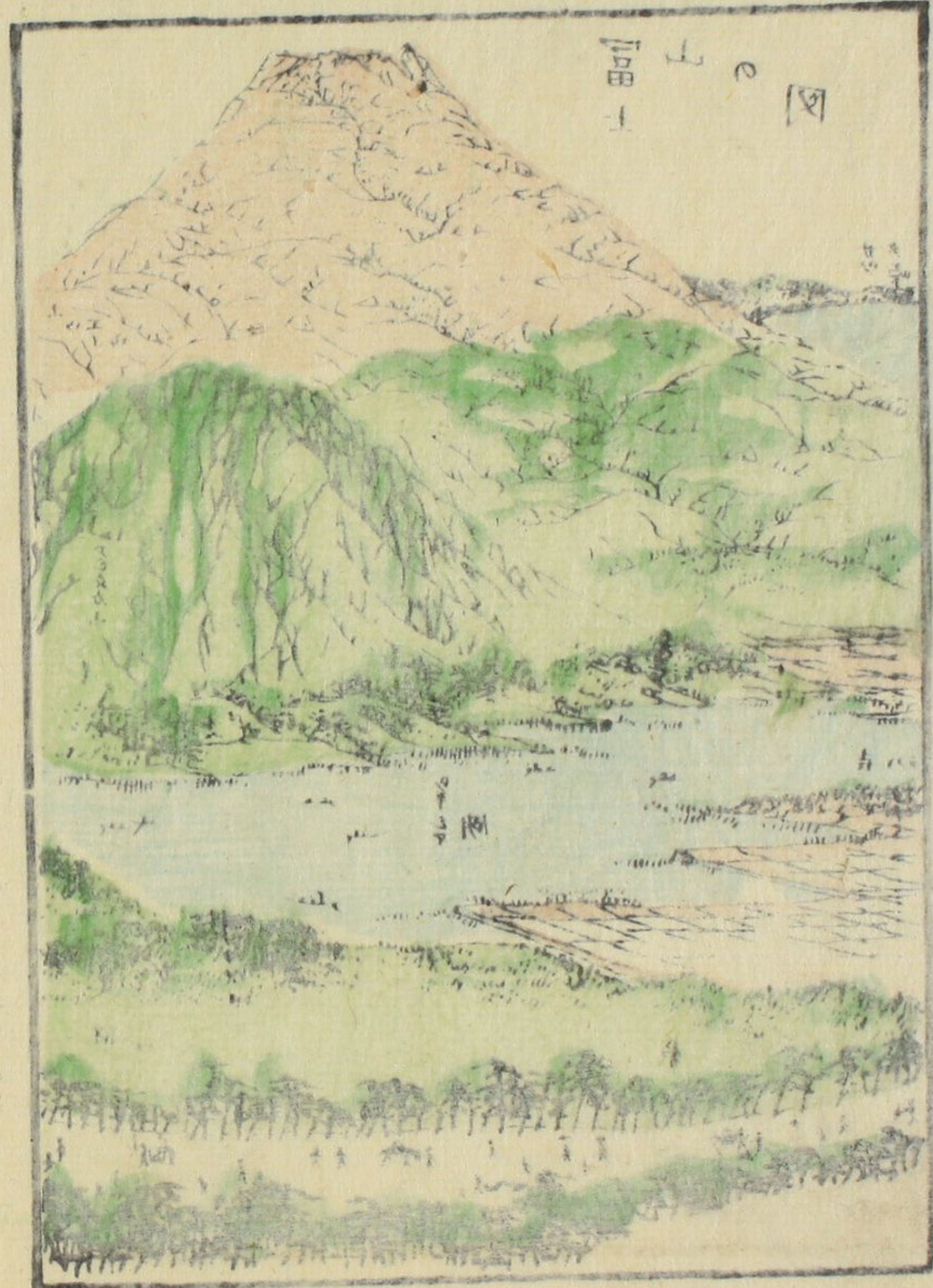
浦頭の其申り清かんが
冥也田子の浦あゆみ羽衣
いづまてしあゆめ絶る事
三保の松旅寐能友も忘る
らん少そ一面山つぐまこ一
の富士の山其なるまこしと海

面より直立一千四百丈に絶
頂を白妙なり伊河内を
載りて林麓を後河甲斐
お模三ヶ國り跨り
其傍り高の山能なるまこ
あゆみ山の上より

又^いま^まきた^ら蟻^{あひ}が^あな^まを^つ垣^{かき}り^も
 なる^は少^ちし。ま^の船^{ふね}也^{なり}播^ま盆^{ぼん}を。
 倒^さり^伏せ^しる^{こと}く^みく。
 四^し方^{ほう}八^{はつ}面^{めん}つ^とま^り。鐘^{かね}を^むん
 同^おし^の主^{ぬし}是^こぞ^火山^のの^下
 今^{いま}より^二千^{ひゃく}百^ご五^{じゅう}十^ご八^{はち}年^{ねん}



田上山の岡



阿まのりおの昔者靈王大
 皇の御宇とて一夜の湧
 出^{やめ}山ありとていふ^いの
 言傳^{ことば}あり不思^ふ儀^ぎの子^こ
 ゆゑに^{ゆゑ}修^{しゆ}せぬ人^{ひと}あは
 げ^げせむ^{せむ}世界^{せかい}を^を度^{たく}ら^ら

日本国志卷之六
二ノ下 安倍川の傍り 靜岡
縣の廳あり。駿河一國を
管及。轄一町。殊に 繁昌
す。此一國に人口を二十
三千余に於て其者もいふ
も。山を脊負ひ海を抱

あまのこゝろ。あまのこゝろ。あまのこゝろ。
西里利加里。ジヨル口の岸
の出来し。阿り。儲は國に
川を。一。富士川矢の如く
あまのこゝろ。あまのこゝろ。あまのこゝろ。
西里利加里。ジヨル口の岸
の出来し。阿り。儲は國に
川を。一。富士川矢の如く

日本国志卷之六
十六

東河を帯びてくる國方
を室屋中へ温暖な地味
一帯を厚くれど人多く
遠くともこのまじり
くくて實をたぐき取
なき風もや其産物乃

品々駿河半紙竹細
工松皮富士苔沖津鯛
才八甲斐も山中の偏地
と一部會海あり
北に五つ南を富士山
流る富士川

此之流支流國內より縦横
 通して西の方地は風皇
 駒嶽白山嶺の山脉七面山身
 延山より引連る里小より向一が
 金峰山板垣山より天目山
 高の山多き此の中小甲府と

之る都府ありあり
 たる山梨此縣の支配を甲
 斐一國生一國此人口を二十
 九万七千余氣候不西より
 向をなすくたが草木のみ
 生茂り人氣を餘り流る

不道理なること多しとて
予一武田此時位も後
しそそ然ありと云ふと其
産物も幡漆紙や郡内紬
穀物も少梅り姫胡桃
東海乃の才九番伊豆も

駿河と相模との間より出する
岬ありとて方々刻々海岸
みく。此れを箱根の険を負
ひ相模の國と此國界中
天城の山あり。所々多し
七島の外り。青島八丈等

海と利し多く所ふ
温泉湧き出く中水鏡
名湯も相摸ふつぎし
海岸に熱海の海の名え
ありて悪疾難病ある人
を苦しむを厭ふてみあつふ

集ふく浴をたふさるや
南ふさし出く其端ふ下田
の港船ありて燈の光をま
つるまきく海上遠く輝
渡る往來の船の雲は月
光を仰ぐぬもれあり

國中一國十二萬五千五百の
人口も。畠多し。て田少く
四時の気候も暖く。民俗
強中の強なり。偏境あり
何事もし。第一は。米穀
なり。尅も。此より。至りて。

其風俗も一あり。其管轄
も一國なり。隣國相摸の是柄
外諸國産も。亦飽ハ。火油
紙と竹。
十小相摸の南も。お物産
と。遠州の洋も。つぎて。

浪高く其海中へさし出
る。岬も安房と相對し武
蔵の海の袋口。こゝも燈明
臺あり。渡海の船の便と
して西より小笠原山大山
津久井丹澤山は山々あり

流ゆる水は濁白と甲州
より流れ来る馬入と名
二つの川は海へ出づ。馬入の
東の三郡は隣國神奈川
川は支那より七里が深也
江の崎也。名勝多し。北は

中^{ちゅう}一^{いち}鎌倉^{かまくら}の^の中^{ちゅう}一^{いち}源朝臣^{げんしよん}頼朝^{よりとも}の^の創業^{そんごう}あり
古^こ一^{いち}霸^{はく}の^の跡^{あと}昔^{むかし}中^{ちゅう}一^{いち}
た^たま^また^たる^るを^を又^{また}横濱^{よこはま}賀^が延^{えん}
港^{みなと}も^も造^{ぞう}船^{せん}寮^{りやう}を^を建^たてる^て
蒸^{じよう}気^き軍^{ぐん}艦^{かん}高^{こう}船^{せん}を^を新^{あらた}り

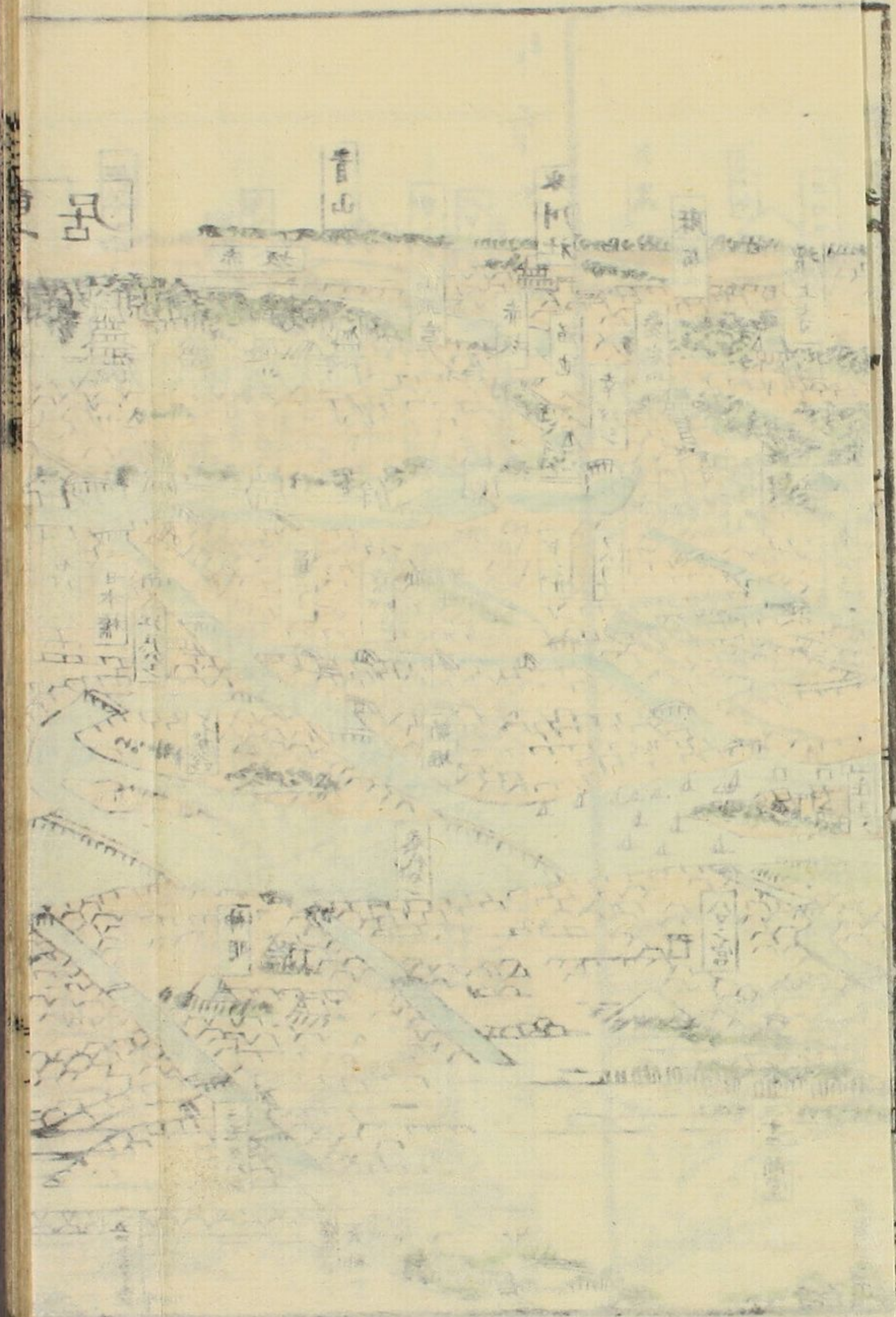
造^{ぞう}り^りま^まま^まく^く玉^{たま}ふ^ふ西^{せい}の^の根^ね
能^{のう}山^{さん}上^{じやう}る^る伊^い豆^づと^と大^{だい}
國^{こく}界^{がい}音^{おん}ふ^ふ少^{せう}え^え一^{いち}天^{てん}嶺^{りやう}の^の
上^{じやう}下^げ八^{はち}里^り此^{こゝ}大^{だい}崎^{さき}を^を頂^{たか}上^{じやう}の^の
湖^こ水^{すい}を^を富^ふ士^しの^の高^{たか}根^ね此^{こゝ}
新^{あらた}る^るに^に眺^{なが}望^{ぼう}を^を取^とる^る系^{けい}を^を

湯治の宮の縁の箱
 根の麓小田原と足柄縣の
 廳を以て馬入以西の六郡
 と伊豆一國を管轄す一國
 九郡の人口を二十七万八千余

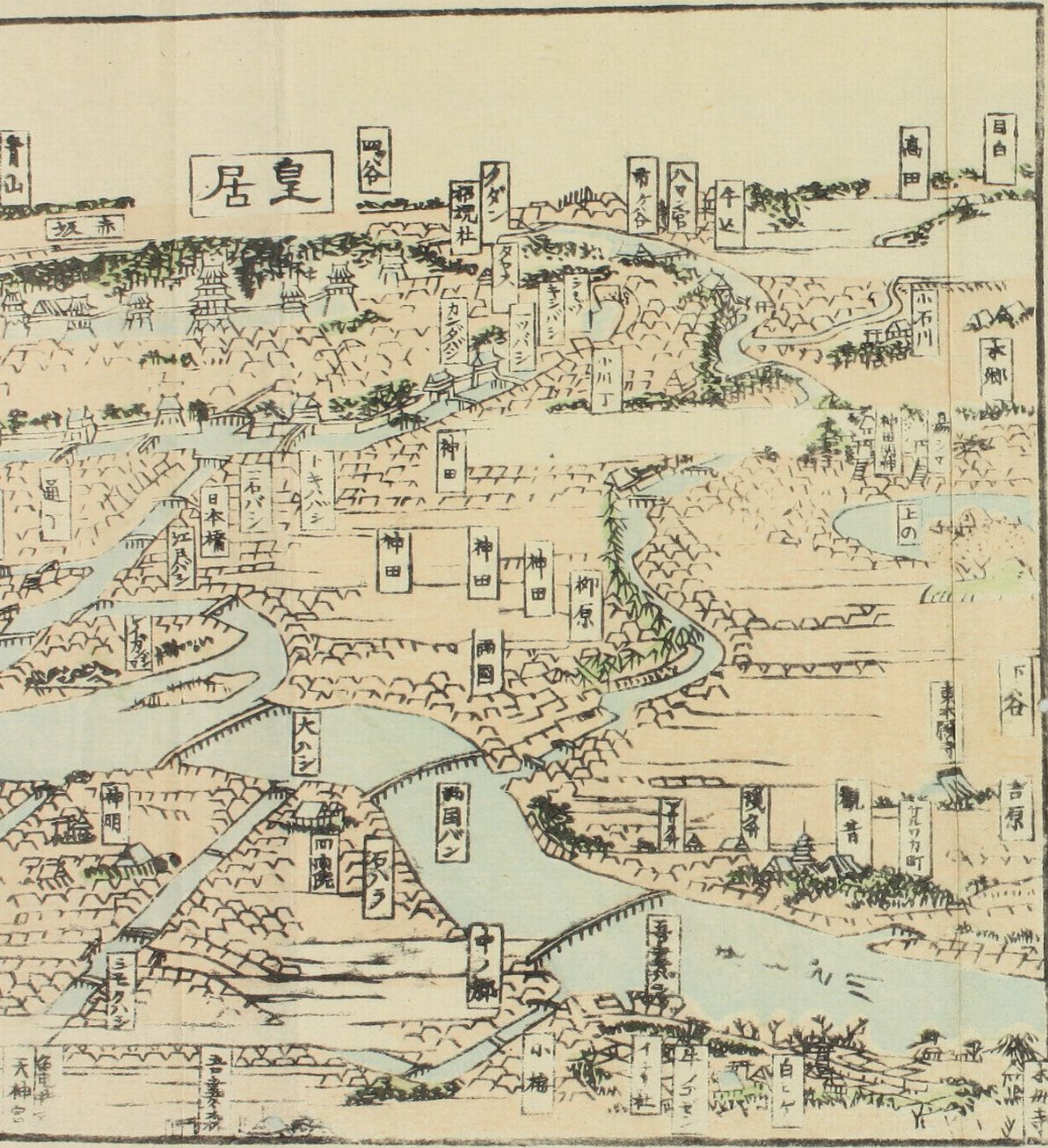
山子と云ふ氣おほく
 海子と云ふ氣候平なり人氣
 を豆物少似れども世
 間は時々随て轉變し
 易き所あり其産物を
 海産梅干大根鎌倉海産

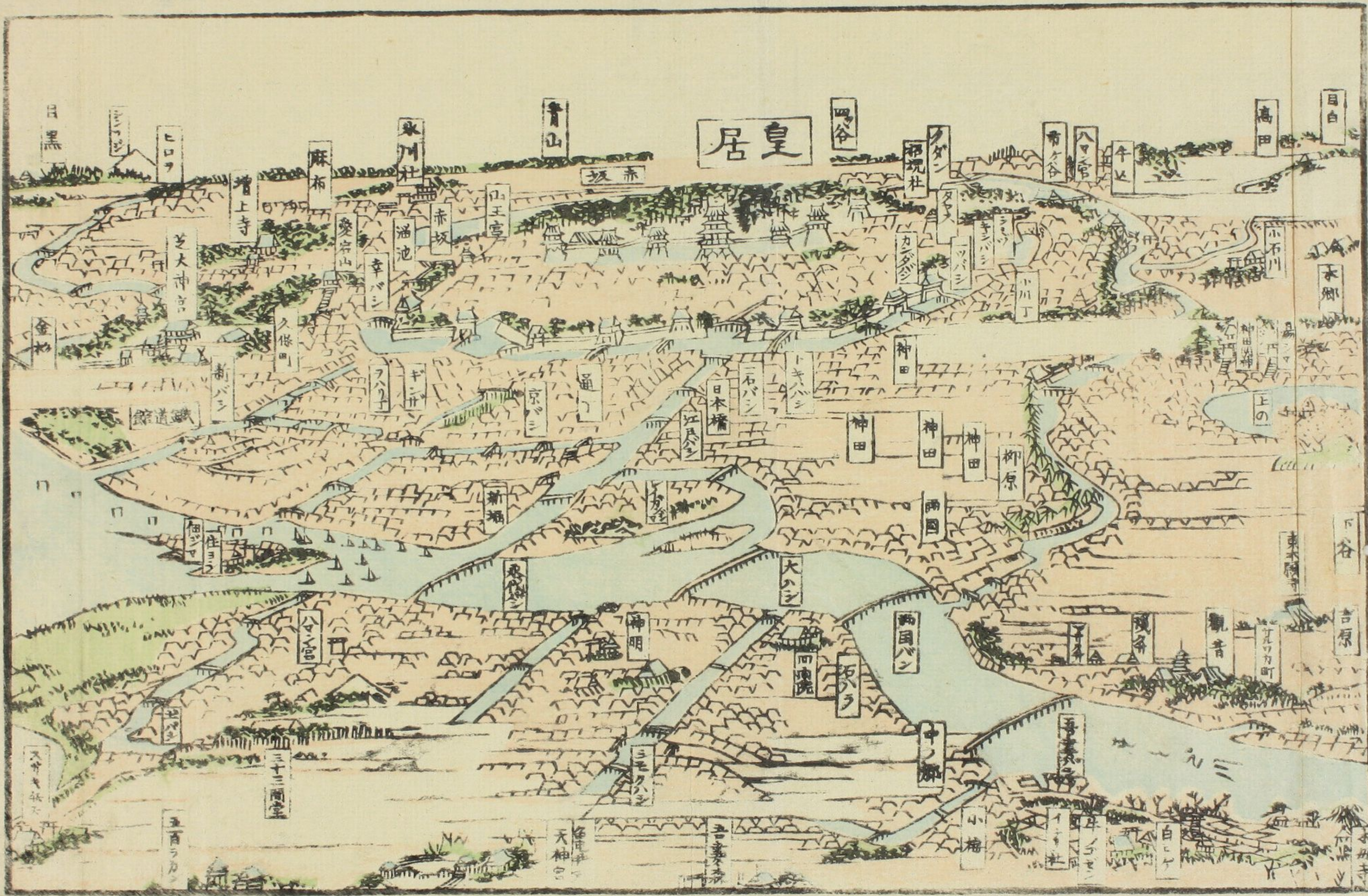
日本圖書

才十一も武蔵少く平原
 廣くついで一冬空しく不
 草の原さよりぞくを後
 又草小の月影と詠し
 今も一坪の美人今もこのかた
 土一坪をり黄金の花を美く

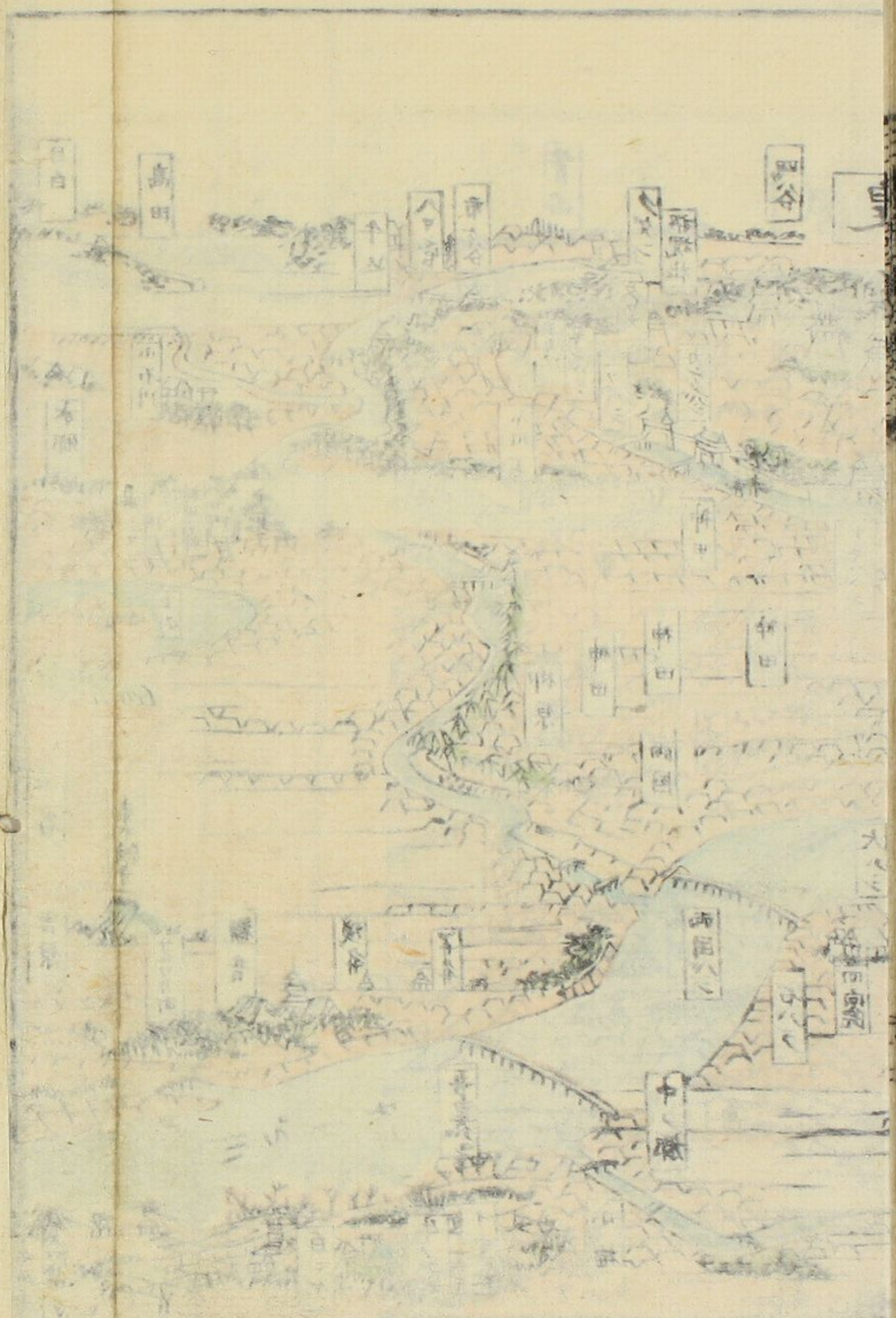


才十一も武蔵少く平原
 廣くいふ一も空を一つ不
 草の原さよりそそを後い
 又草小の月影と詠しも
 今も一坪の美人今もふこの花
 土一坪ちり一黄金の花を美く。





土一井ちり一廿八金のつたをさく



東京府とて四里四方世
 類なき大都會其人口を
 百万余数千の大厦林
 似億方計の商戸星を
 碧石瓦白壁土立を
 並ひ錐を
 立つべき土地を

町々新築業々人の往来の
肩え摩れ馬車人の音
絶えむ連る袂も幕は
くく揮る汗も雨を
な高賣日々盛ふ
く百貨業々輻輳を殊よ

戊辰年乃王政一新以来を
萬機の出づる所少く官省
寮目吏々々々豊を連る祿
窺く尚々中ふたなびく
白雲の如く九重より立つ禁
城を空々々々塔身を以て

日本書紀卷之三十一
廿八

高く天津日嗣にいつまでも
え。位一玉ふ宮所のあり
の長城不夜の城昇平極
樂世界ともそは都を也
つふなるん。まーと近東の
國は交易盛ふおつたを也。

美玉人し居ををらく共ふ
王仕り海を其其の大
學子小學の程し思ひ教
おほく。學子の道はたを
よく。男女の子供おたて
教を又思ふのそらあら

日六臣三卷三

しめんの海をさしゆく我を
有るに子なるもを柳
子の道は人の智識を
おん世に風俗を教く
し家富む昌え子を
起し一人前の人となる。

ためやあまきそ是非も
子貴賤男女のるを列あ
け交のそその音子をみ
土地の字授けを今
是を運ぶて眼目し
を字あべし夫らとて措き

當國に土地を前にもいふ
ごご其のしりて武蔵野
とく。曠原平野お結き世
二郡の大國とく北と東と
上野と下野と下總と界
て界を流るる流るる世

利根川の名も高く三大河
中流一して坂東太郎と
字せり。生源を上野と
其餘の國より流るる来く
甘樂川乃下流なり次
中川を流るる葛西左郎

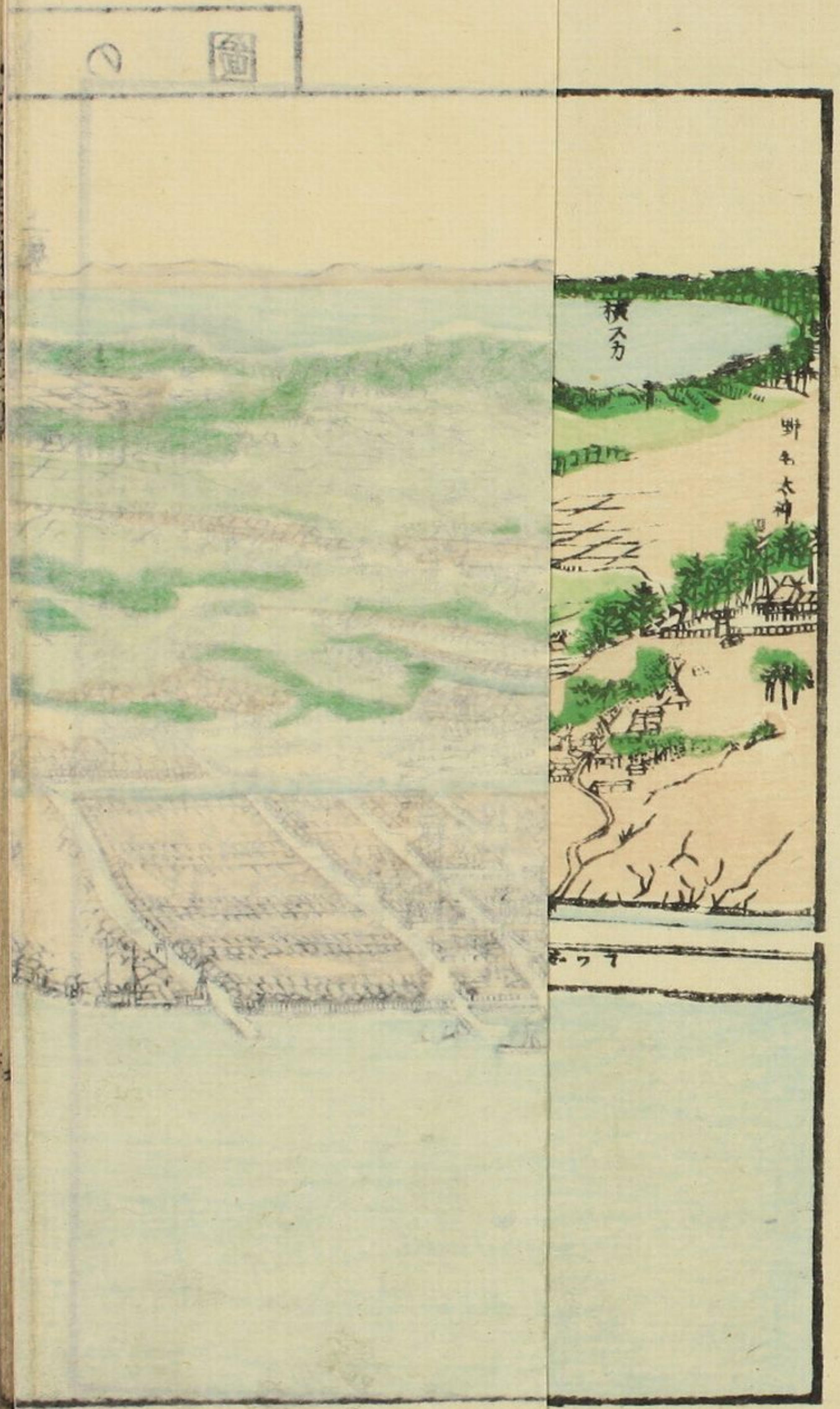
の角田川其上流を秩父川
角田の川を少田國の才一と云
類は好奇景富すと筑波
を東西り隔て互を
相照し東風林とて春
の日にて長堤一帶みな桜

櫻は花をさしぬ雪を
くく二匹の堤の上を織衣
よりんおまきおひの人
夏も袖染り秋も月
川風をき冬の日にてふ
棹さして雪見船四季節

の暇初まら。昔事しん記し
そさねむ。南東を一面ふ。
武蔵の海に八海く日
本に大港大船小船数
千万。蒸気帆前の西洋
船行り入り其夕又出

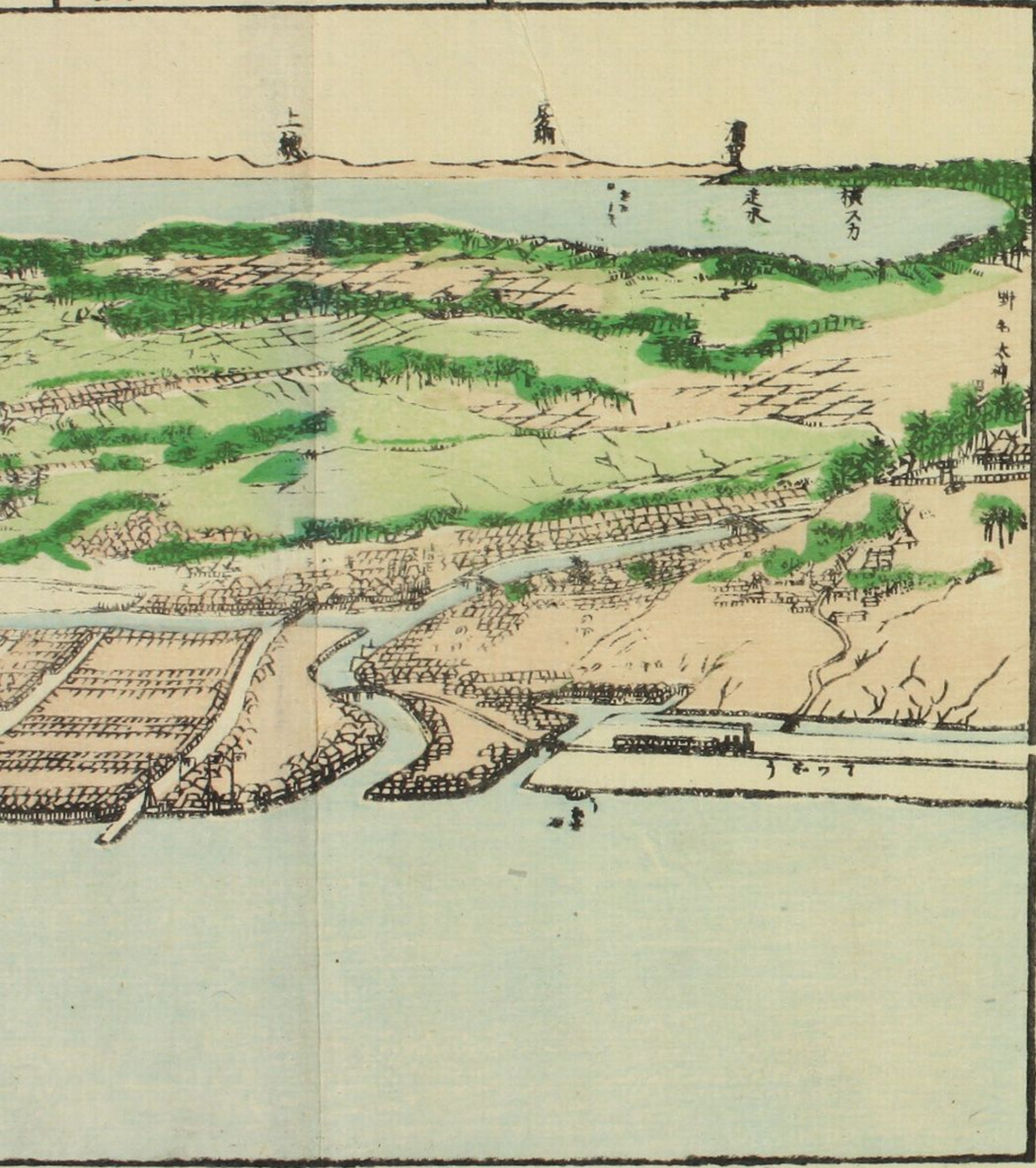
りく光る京を四海の潮
みかこふつとひ東より
疑うる。西のふら甲斐信
濃つてもそ秩父の山と河
嶽三峰武甲山南を小佛
高尾山甲斐の國より流

まき束くる。水みづを多た摩ま川がわ津つ
 らのり。流ながれをく末すえら六ろく郷きょう
 の流ながれを過まる海うみへ入いる。地ち面めんの
 束くる系けいに食く水みづを地ち面めんの
 下したを掘ほるを埋うめぬ多た摩ま川がわ
 の流ながれをく束くる。町まちを所ところと

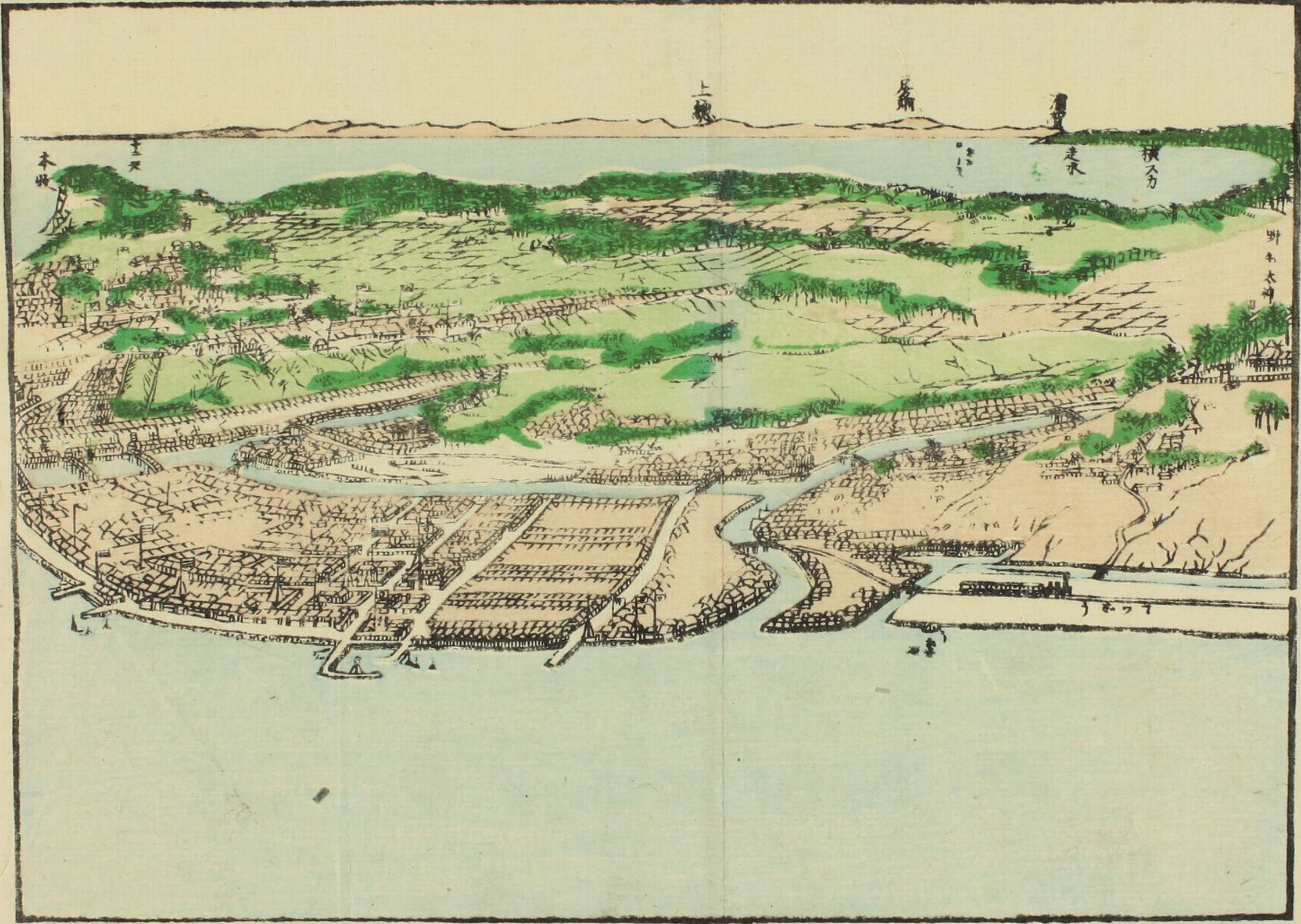


まき束くきたる。水みづを多た摩た川がわ津つ
 らのらり。流ながれをく末すえら六ろく郷ごう
 の流ながれを過まぐ海うみへ入いる。持もち
 束くきたる。食くわべに地ぢ面めんの
 下したを掘ほり埋うめ多た摩た
 の流ながれをく束くきたる。町まちの所ところ

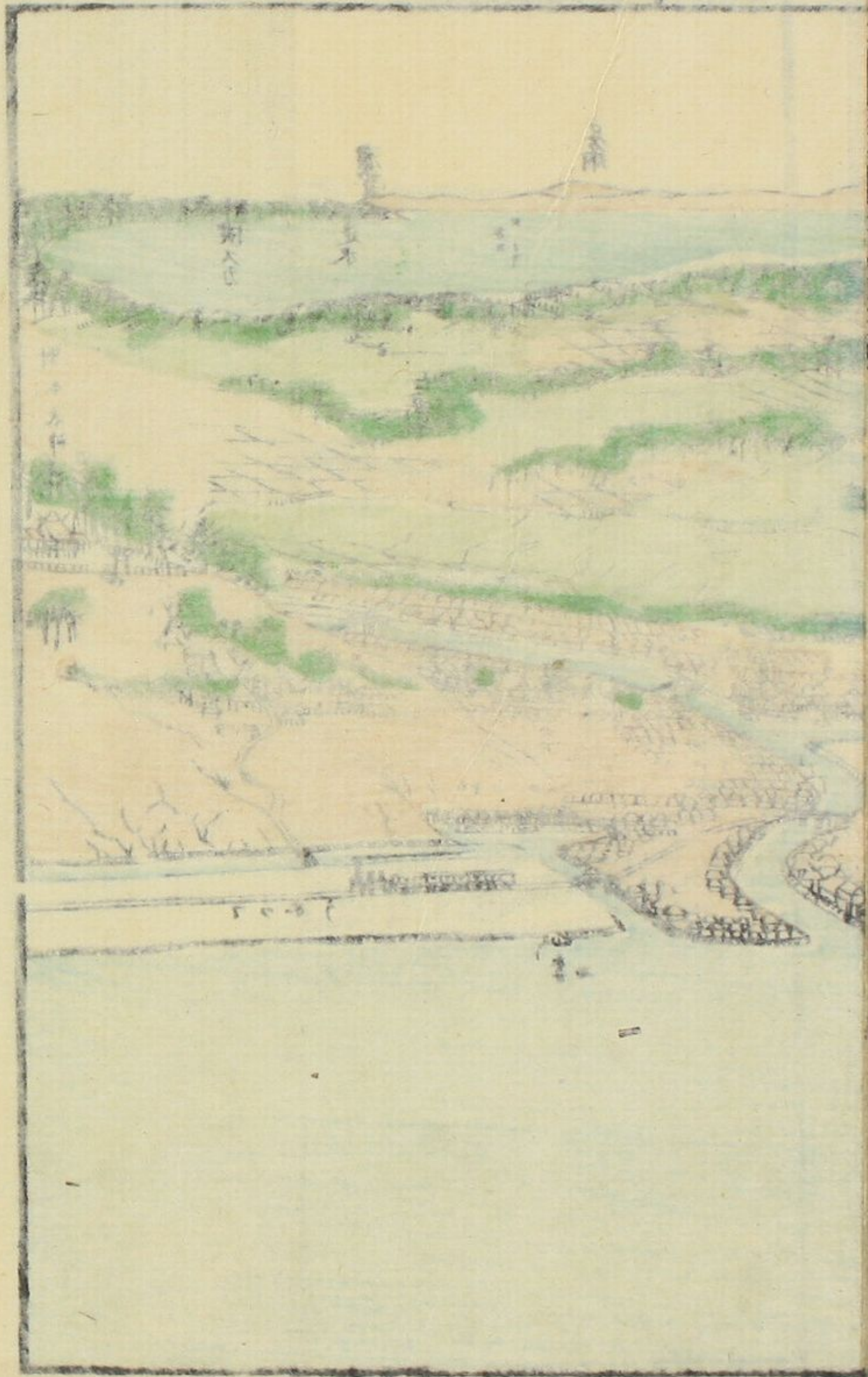
横濱の圖



横濱の圖



下
 の流を引き来り
 横濱を埋め
 町を多
 敷く



下分つともや東京よりそ
 路七里海岸つたひ南は
 方。神奈川宿の生つたの横
 濱港を今神貿易高
 社の一大廊輸八輸出の軒
 として富商大賈を軒を

並く畫樓繡閣天を突く
亦是二箇のふ束の棟を突く
仙境は心地せまき持身下より
去くち電子乃涼をつたふ
金澤り又も得るべき風景
の暇望画しん寫をりとり

昔巨勢の金岡に筆を
捨てて理我さくくはまの
管轄を一府三縣よりお分
き。東京府中の府廳ふ
ち。社原と豊嶋の二郡
夫より是を立く首飾の由

を分つて管轄す。西の郡
能十三を八間郡の川越
へ分るぬの配あるを合
之を支配せしむ。其又水の埜
五と。埜まは是と首の埜
埜玉郡岩柳埜埜玉縣

廳の支配す。南四郡と
ふは相摸の國乃三郡の三
浦福合あるを合
支配する廳のかの様
の神奈川ぬ支配各
きと。武蔵一國を總計す。

二十二郡其人曰々一百六十
六万人之室者中出地紀
田畠一併考方なりさう終
解之もきびしき事
とんり風多し其風何
等廣く性質さう活

達少く物々屋せぬやうな
きこと。都合の地ありて自
奢美より流さく海弱
隘風も少なりしは性
むくまの事一たあり其産物
の大概も浅草海苔小久我

索麵 岩槻 本綿 唐子 波赤
 氣 漆 也 錦 繪 子 醫 結 合
 羽 的 烟 子
 身 十 二 十 三 能 安 房 上
 總 地 を 隣 土 田 以 安 房
 子 上 總 二 一 合 を 一 廣 大

の 海 へ 一 岬 一 相
 撰 武 越 一 對 一 武 越
 能 海 を 西 國 也 東 也 東 也
 有 き 大 平 海 也 東 也 東 也
 山 多 嶺 岬 の 也 又 所 也
 也 其 界 目 也 鋸 山 在 立

崎清水山土地の冬季候を
武藏地とのまじりしも
あぢきましとん人の氣腹を
偏居し安座より人口十
三万上總の國は一國より三
十六万四千余とあるはの官

轄より上總の國は本更津
とて武藏より向ひ一港
土地お趣おある本更
津船屋を立置きの安座
を浪の子本綿苔目
黒鋸や上總より大々喜

鯿くわ子こ 鯿くわらら 楚そここ 下か玉たまよよ 武ぶ統とあ
 るる 楚そここ 水みづ。
 才さい十四じゅう少しょう 下か總ととと 武ぶ統と
 とと 總とりり 挿さすすりり 武ぶ統と
 の海うみにに 依よるる 下か 常じょう陸りく小しょう
 地ちをを 隣りんりり 坂さか東とう太た郎らうのの 地ちにに

末すえとと 下か野の常じょう陸りくにに 山やまとと 川かとと
 流ながすす 出いづづるる 川かとと 共ともにに 集あつつままるる
 ままりり 堰ゐりり 界かいいりり 沼ぬみみとと 海うみみ
 入いるる 地ちをを 一いつ体たいりり 川か
 河がおおほほくく 沼ぬみみとと 武ぶ統と
 つつとと 武ぶ統ととと 又また 平へい原げんにに

おほしと我沼の嶺を大なる
るを即播郡の嶺を沼の
近小佐倉とて山田と西部
の九郡を六管に轄たせる縣
廳向里之を即播の嶺とい
ふ跡里東北三郡を隣に

常陸に土浦の新治縣に
支配あり合をく國の人
口を四十七万八千余風土風
俗みななましく上總の國より
美あり其産物を各管西
海若結城細川三友西木

十五常陸一國を東海
 乃のまて此國西亦山よ東
 海池沼川水充滿し西北
 隣の下野より流るる川を
 那珂川也北より東來る之慈
 川なり其名も高き筑波

嶺の山峯よりなる水名新
 川水名那珂川水流是東を
 霞が浦の東をぬけてのけ
 きぬけを東より常陸の
 一勝地を信濃の土浦の新治
 船の碇揚を南よ六郡之

又下後ノ阿る三郡也。
筑波ふ列る山々を
河へ伸し北へ金
砂高鈴山磐城の界なり
花園山々五郡も那
阿河は水戸の茨城

縣其縣廳は支配なり一國
中の人其數四十八万五千余
其風俗も只管々
して我意おほし其産
物も葦和用鯉西は内紙
小坂原なり。

瓜生氏日本國盡卷三終